
秘密～異世界ハーフの受難～

楓

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

秘密〜異世界ハーフの受難〜

【Nコード】

N8068R

【作者名】

楓

【あらすじ】

異世界人とのハーフである雅。

ハーフであるが故に起こる突発的事件と事故の日々。

これはただ平凡に暮らしたいだけの少女とそれを許さない周囲との戦いの記録である（笑）

突発的にわいたお話の為、不定期更新になります。現在は、目指せ週1更新が目標。

落ちちゃいました（前書き）

突発的に思いついた作品で、異世界物の練習作になります。
多分、そんなに長くはならないかと思いますがよろしく願います。

落ちちゃいました

わたしには、秘密がある。きっと誰に言っても信じてもらえない。その秘密とは、何か。

一つ、自在に世界を渡れること。いわゆる異世界トリップが自由自在。まあ、そのせいでかなり面倒くさい一族の一員でもある。まあ、ここらへんは、許容範囲内。

二つ、異世界人のハーフであること。許容範囲外な秘密は、こっち。何故なら、父親が指名手配犯的な立場だから。その上、ハーフの悲しき性で向こうの世界の引力に引つ張られあちらの世界にたびたび落下。そして落ちた先では、容姿その他が変化してしまうのだ。その変化した姿っていうのが父親色かなり出るんだよね。それに体が縮む。冗談ではなくね。現在の年齢引く十歳前後？ だからいつもは、さつさと帰るんだけど。こんな事態になるとは。

(……………どうしようかな)

「おい！ 貴様、人の話を聞いているのか！」

「耳、痛い」

「だから、貴様は何者だ！ 誰の命令で」

先ほどから目の前で青筋を立てながら怒鳴りちらす男に正直うんざりしていた。黒の軍服らしき制服に身を包む金髪長身の男は、延々と叫び続けている。その青い瞳に整った顔は、間違いなく童話の王子様だ。……………姿だけはね。

だけど、美形と呼ばれる面々に幼少期から囲まれている自分にとっては中の上くらい。その上短気な男は嫌いなので無視していたがさすがに耳元で怒鳴られるとつらい。

「まあまあ、そんなおチビちゃんを使うほど彼らも落ちぶれてはないでしょ」

「何を気楽な事を言っている！　ここをどこだと思っている」

「うん？　我が宇宙軍基地内の殿下の私室だよ？」

「そんな場所に普通の子供がいきなり現れるはずないだろう！

」

「まあまあ……………」

それまで黙っていた赤毛の少年が溜息をつきつつ金髪男を宥めにかかるが効果がない。それでも一生懸命話を聞き続けるその忍耐強さに尊敬の念が少しわく。

（うわー、やっかいな場所に落ちたな。さっきの女の人って王族なんだ）

そして、男達の会話を聞きながら、先ほどまでいた背の高い女性を思いだす。

その人は、金茶の髪を長めのショートカットにした人で、いきなり目の前に落下してきた自分を見て動じることなく言った。

「君は、誰かな？」

「雅。こつち風の名前は、リリアナ？」

「自分の名前なのに、疑問形なのか？」

「だって普段使わないもん」

「そうか。それにしても何でそんなに大きな服を着ているのかな」

「身体が縮んだの」

身体が縮むなど信じる人間はいない。だからこそ、わざと真実を教えることで頭のおかしい子供と思わせ警察なり施設なりに送ら

れるように仕向けた。一人になりさえすればさつさと道を開いて帰れる。しかし、この女性違った。逆に目を輝かせながらリリアナに近づいてくる。その予想外な反応に思わず後ずさるとぶかぶかになった服に足を引っ掛けてしまった。

（いやゝ、このままだと確実に頭打つゝ）

目を閉じて来るであろう衝撃と痛みに身構えたがいつまでたってもそれは来ない。その代わり体がふわりと浮いた感じがした。恐る恐る目を開けるとすぐ近くに女性の顔があり、どうやら彼女に抱え上げられたことが分かる。

「危ないぞ、リリアナ。ここの床はかなり固いんだ。それにしても……………、まずは服だな。確か私の幼少時の服が残っていたはず。ちよつと待ってくれ」

そう言うなりリリアナを抱えたまま近くの机の上にある内線機器に手を伸ばす。するとすぐに声が聞こえた。

『どうされましたか？』

「ああ、カインか。セシルに私の昔の服を持ってくるように言ってくれ。そうだな、七歳前後に着用していたなるべく小さな服を…

……………」

『はい？ ヴィクトリア様？ ということですか？ すぐに参ります！—！』

「しまった。オリバーに頼むべきだったか。すまないが、これからうるさいのが来るが心配なくていい。話したくなければ話さなければいいからな」

「分かった」

そして、現在に至る。たしかにあの女性、ヴィクトリアが言った通りカイン（金髪男）はうるさかった。一緒に来たオリバーは、こちちを見て何か驚いた様子だったけどすぐに楽しそうな笑みを浮かべた。その笑みに嫌なものを感じとったのは気のせいではないと思う。あれは、時々父親が兄達に向けるものと同種だ。カインよりオリバーを警戒すべきだ。

（それにしても遅い。ヴィクトリアは何をしてるんだろう）

するとそんな彼女の心の声に答えるかのように扉が開いた。そこにはヴィクトリアとヴィクトリアと…………。

その光景に思わず意識が飛びかける。彼女の手にはピンクや黄色など可愛い色合い布地にたくさんのレースがついたワンピースが山のようにあった。更にその後ろからは他の衣装を抱えた女性が現れる。何故だかその目は輝いており嬉しげでもあった。

しかし、何故だか反対にリリアナをゾクリと寒気が襲う。

「待たせたな。リリアナ」

（いや、逃げたい。お家、帰る）

私が落ちた国

まずは、この国について軽く説明したいと思います。

国の名前は、ウイスタリア王国。首星である惑星と皇家を支える五侯爵が治める自治惑星からなる国で、議会制の民主主義ではあるけれど最終的な決定権は今も皇帝が持っているらしいです。

ヴィクトリアは、現皇帝の第2皇女であり宇宙軍の士官である立派な方なのだとカインは、鼻息も荒く説明してくれました。

「……………うん、トリアが立派なのは分かったよ。分かったから私を解放してくれないかな」

「突然現れた不審者を取り調べもなしに解放するわけないだろう」

「私、こんなに小さいのに」

「ふん、見たところ15歳程だろう。そこまで育てて幼子を語るな」

「立派に子供だもん。……………ヒスじじいが」

「何だと!!」

「よさないか、カイン」

「そうだよ、大人げないし。それに精神は成長しててもまだ肉体が追いついてないんだから、彼女の言う通り子供だよ」

そうこの国の人々は、地球人とは違い長命で肉体の成長速度はかなり遅い。つまり、自分は立派な子供。だから、早く街に解放してくれないかな。そしたらさっさと帰るからさ。

「リリイ。ここは軍施設だからね、カインの言う通り君をすぐに自由にするわけにはいかないんだよ。それに私も色々聞きたいことがあるからね」

「話すことなんかないよ。というかそろそろ離してくれないかな

」

「待ちなさい、もうすぐ終わるから」

「ええ」

「そうですね、あとリボンだけですから。ね？ さあ、お菓子をどうぞ」

そう言ってお皿にケーキを載せて手渡すのは、セシルという女性でトリア付きの侍女さん。さっきトリアと二人で山のような服を持ってきた人。

そして現在自分はどうしているかという到着せ替え人形になっています。

二人にあーでもないこーでもないと着替えさせられること十回。その結果、薄紫の布地で裾にレースをあしらった長袖タイプのワンピースに着替えさせられた。そして、仕上げとばかりに髪を編みこまれてます、嬉々とした表情のトリアに。

（もうどうにでもなれってんだ）

諦めの境地に達したりリアナは抵抗を放棄して渡されたケーキを頬張る。その姿を見て何やら頷く人間と目が合う。すると彼はにこりと笑ってこちらへ近づいてきた。

「どうやら彼女は、奴らとは無関係だね」

「は？ どうしてそんな事が分かる」

「もし彼女が本物の刺客ならば、敵に出された食べ物を平然と口にしないよ。まあ、どういった人物なのかというのは非常に気になるけど」

「だから、家に帰るからさっさとここから出して」

「リリイ。ここから出たら君は死ぬよ」

「何で？ 不法侵入で殺されるの？」

「いや、そうではなくて。この軍施設は惑星上空にあるコロニーだからね。外は、宇宙空間だから出た瞬間死ぬぞ」

「そうなの？ 危ない、危ない。うーん、じゃあ牢屋にでも放りこんでおいてくれると嬉しい。てか、むしろ希望？」

「君みたいな可愛い子を牢屋になんか入れられるはずないだろう！！」

「あつそ。でも、私は何にも話さなし。留めておいても経費の無駄だよ」

「それならいいさ。いつまでも側においてこうやって愛でるからげ！ トリアってそっちの人！！」

「動かない！ 私には異性の婚約者もいるし、彼と添い遂げる覚悟もある。ただ、可愛いものを愛でるのが好きなだけさ」

自信満々に言い切るトリアにカイン達は、溜め息をつく。

「別に私可愛くいし。普通だよ、色味がめずらしいだけで」

「何を言う。リリイは、十分美人だ。君は、大きくなるにつれて花開くタイプだ！ 私が保証する」

「そうだね。その白金の髪に紫紺の瞳は、素晴らしいよ」

「はいはい、どうも。褒めても何も出ませんよ。ねー、ちなみにここは首星の上？」

「いや、惑星シアンの上だ」

「ちっ！ よりにもよってシアン。最悪だ。早く、帰りたい。ね、本気で解放してくれないかな？ 早くしないと悪魔が来る」

「悪魔？」

「そう、悪魔！ 人の弱みを笑いながらつく最悪な悪魔が来る」

逆らわないようにしよう。(前書き)

お気に入り登録ありがとうございます。
ちまちまとですが更新していきたいと思えます。

逆らわないようにしよう。

ここがシアン侯爵の自治惑星上空なら来る。絶対に来る。自分にとって恐怖をもたらす存在が。次兄という名の悪魔が。でもさすがにここにいる事は、すぐには知れ渡らないはず。なら、ばれていない内にさっさと帰るしかない。

「トリア、私そろそろ帰ることにする。ううん、帰る」

「帰すわけないだろうが！」

「ああ、うるさいなあ。男のくせにヒステリー起こさないでよ」

帰ると宣言した途端、騒ぎだしたカインにうんざりしつつ席を立つ。そして自分と一緒にこの世界に落ちてきた古い皮鞆に手を伸ばす。しかし、体が縮んだせいか少し持ち上げるのが限界だった。仕方なしにそのままズルズルと引きずる。テーブルの上に持ち上げる為、鞆を抱えようとしたところで横から手が伸びてきた。その手は、軽々と自分の代わりに鞆をテーブルの上にのせてしまう。

（縮むって本当に不便だ）

心の中で愚痴りつつ、手伝ってくれた人物を確かめようと手の持ち主に目をやる。手伝ってくれたのはオリバーで、相変わらず何を考えているのか分からない笑みを浮かべていた。

「ありがとう」

「どういたしまして。実は気になってたんだよね、その鞆。君が殿下の着せ替え人形になってた間にちょっと見せてもらってたんだけど、何をしてても開かない。その上、留め金には、鍵穴が一切ない。

不思議だよな」

「別に普通の鞆だよ。『開錠』、ほら開いたでしょ」

（まあ、私の言葉がなければ開かないけどな）

鞆の中を漁りお目当ての物を探す。その過程で背後から大きな溜め息が二つ聞こえた。一旦、手を止めて振り返る。するとカインが額に手を当て何かブツブツと呟いているし、オリバーまでもが手で口を塞ぎながら首を振っていた。

「何よ、言いたいことがあるなら言えば」

「お前、女だろう？もう少し整理整頓をだなあ」

「うん、今のうちからきちんとしたほうがいいよ」

真剣に諭されると素直に受け入れがたいのは、何故だろう。

「別に困らないもん。私は、ちゃんと中身把握してるから」

「そうは言ってもだな。おい、洋服ぐらい畳め！ シワがよるだらう！ 貸せ」

そう言うなりカインは、リリアナから鞆を奪うと中身を取り出して片付け始めた。

（おい、乙女の下着の替えまでちゅうちよなく触るとはどういう事だ。その上、私の体。特に胸を見て首を傾げるな）

ついに我慢の限界が訪れた時だった。いきなりカインとオリバーが吹っ飛んだ。何が起きたのか理解出来ずにいると地を這うようなおどろおどろしい声が響く。

「女性の荷物を許可なく触れるなどありえません。一度死んで学び直してらっしゃいな」

そこにいたのは、侍女の制服の裾をたくし上げたセシルさん。二人が吹っ飛んだのは、彼女の超高速の回し蹴りをくらったため。後から聞いたけどセシルさんは、二人の上官でトリア専属の近衛隊員なんだって。うん、これで誰に一番逆らっちゃいけないかが分かったね。

ピンチです。

「これでよしと。ところでリリイ様は、何をお探しで？」

「その赤いリボンがついたポーチ」

「これですね。どうぞ」

「ありがとう」

セシルさんからポーチを受け取って中を確かめようとしていると何やら上からじっとこちらを見つめるトリアに気づく。その表情を現すとしたら、呆然という言葉がぴったりだ。

「どうかしたの？」

「どうかしたのつて、その荷物の量は、有り得ないだろう。どう見たつて鞆と入っているものの量が合わない」

「そうですね。私もどうやってしまうのか興味深いですわ」

「えっ、そこに驚く？ いやいや、体が縮んだつて事のほうが大事でしょうが」

「リリイが可愛くなるなら問題なしだ。だけど鞆は別だ」

「そうですわ」

そう力説する二人に力が抜ける。

まあ、二人がいいならそれでいいのか。いや、よくないけど。

「じゃあ少ししまつて見せるよ。まず、これとこれをいれて鞆を閉める。それで『収納』、はい開けます」

蓋を開けるとあら不思議さつき入れた荷物が消えました。さあ、拍手プリーズ。

「荷物が消えた？」

「まあ、何て便利な鞆。でも、どうやって取り出すのですか？」
「ん？ 『水玉タオル出して』」

するといきなり鞆の中にさつき収納した水玉タオルが飛び出て来た。

「……………ありえん」

「不思議ですわね」

「触つてもいいか？」

「うん、トリア達なら大丈夫。その子は、基本的に女子が好きだから」

「『女子好きの鞆！？』」

「さあ、どうぞ」

二人の方へ鞆を押しやると恐る恐るといった感じで、手に取り始める。そのすきにリリアナはさつきもらったポーチの中を探る。するとすぐにお目当ての物は発見出来た。これで身分証明は出来るはず。いくらこちらの一族の血筋が絶えたとは言え、この世界で一番長い歴史を持つ国家の直系のお姫様なら知っているだろうし。

まあ、最終手段は兄達の誰かに連絡だな。でも一番手つとり早いけど、一番取りたくない方法だからな。

「トリア、ちょっといい？」

「何だ？」

「うーん、一応身分証明？ はい」

「……………名刺？ 円卓同盟・異世界拾得物管理士 雅・L・香月。円卓同盟！！ あの？」

「トリア様？ 円卓同盟とは？」

「皇家に伝わる伝説の組織。様々な秘術や技術を持ち世界を渡る

者達の集団だ。我が国にもそれに属する一族がいたらしい。だが千年も前に絶えたと……………」

「ということで私を解放してくれる？」

「君が同盟に連なる者なら我々にはそれを阻む術はない」

「いや、一応保護してもらったんだから。そこらへんはきちんと筋を通したいの」

その時だった首筋に冷たい感触がしたのは。首に当てられていたのは、小型のナイフ。さすが、本職の物だけあって切れ味が鋭そう
だ。

「セシル！ 止めないか！！」

「申し訳ありませんがそれは出来ません。そのような胡散臭い集団の人間を近づけるわけにはまいりません。そもそもその髪と瞳の色を持っていながらこの国に関係ないなど言わせません。どうせ、奴らの回し者なのだろう？ お嬢ちゃん？」

ナイフを突きつけてきたのはセシルさんだった。それまでの優しい女性から一転、視線だけで人を射殺せそうなまさしく戦う女に変化する。これは、動いたらやばそうだな。どうするべきか。

トリアを見るととても心配そうな顔をこちらに向けている。うん、つくづくトリアに軍人は向かないよ。

三人の間の緊張が最高超に達した瞬間だった。突然、大きな声が響き渡る。

「隊長！ 子供相手に何をやっているんですか！！」

「姉上、いくら何でも子供を殺すのはまずいよ」

そう言ってセシルの手から電光石火でナイフを取り上げ彼女を羽

交い絞めにしたのは、意外なことにカインとオリバーだった。

ピンチです。(後書き)

お気にり登録、ありがとうございます。

調子にのって更新しました。

ある程度話を進めたら文章のおかしいところを修正&加筆していきます
たいと思います。

口は災いのもと

「リリイ、大丈夫か？ セシルも謝れ」

「いいよ、謝らなくても。セシルさんじゃなくても胡散臭いって思っただろうし」

「しかし……」

「ただこれだけは言っておく。私は、トリアに危害を加えるつもりはない。それにさっきから言ってるよね、帰るって」

今もリリアナを睨みつけるセシルを正面から見据え自らの立場をはつきりと宣言する。もちろん、視線はそらさない。そらしたら負けだ。すると、彼女は大きな溜め息をつくなりカイン達を投げ飛ばす。そして、乱れた服を整えると優しい侍女の顔に戻った。それを確認して、そつと胸を撫で下ろす。

しかし、彼女はすぐにリリアナに詰問してきた。

「では、その異世界拾得物管理士さんにお聞きしますが何故殿下の前に現れたのです？ そもそも円卓同盟とは、何なのですか？」

「とりあえず、ここに来たのは、事故。同盟は、世界を渡る術を持つ者達の集団？ まあ、私は下っ端の下部組織の人間だからよく分からない。というか上とは関わり合いになりたくない。確実に性格が歪むから」

「事故なのか？」

「私は、父親がこっちの世界の人間だから。こっちの世界の引力に引つ張られ易いの。今回は仕事関係の用事をすませて帰ろうと道を開いたらこっちに無理やり飛ばされたんだよね」

「では、やはりシアン侯爵のお血筋ですか？」

「尋問上手だね。やっぱり、隊長は違う。まあ、一応その家系。だからこそ、早く逃げなきゃいけないの！」

「逃げるって……。お前は、何をやらかしたんだ」

セシルに連続して飛ばされたカイン達が足元をふらつかせながらもこちらに戻って来る。その姿にさすが本職の軍人だなあと素直に驚く。それほどまでにセシルの蹴りは、はんぱなかったのだ。

「さつきは、ありがとう。ただの口うるさい男と腹黒美少年じゃなかったんだね」

「お前は、素直に礼の一つも言えんのか」

「少年？　僕は、カインと同じ年なんだけどね」

「ちなみにカインって何歳なの？」

「来月で28だ」

「へー、でも若く見えるっていいことだと思うよ。その内嫌でも老化現象が起こるんだし」

「いい度胸だね。この状態でそれだけ頭と口の回転が衰えないなんてさ。どっかの馬鹿どもにも聞かせたいよ」

楽しそうに笑うオリバーと視線があった瞬間、ゾクリと寒気がした。あれだけ楽しげな顔をしているのに目がまったく笑っていない。

（まずった。オリバーの地雷踏んだかも）

とりあえず、トリアの隣に急いで移動する。すると彼女は、苦笑してリリアナを抱きかかえソファアに座った。そしてセシルに改めて全員分のお茶を入れるように指示を出す。

その間、黒いものをゆらゆらと発しながら空いているソファアに向かって歩いてくるオリバーから逃げるようにぎゅっとトリアに抱きつく。

やつもさすがに主にギュッと抱きつく人間には手を出せないように思い切り舌打ちをすると黙って空いている席につく。

(うん 帰るまで) (うん)

私が逃げたい理由

「ということで帰っていいかな」

「何がということだ、全然説明になってないだろうが」

「ちつ、流されないか」

「リリイ、女の子が舌打ちするものではないぞ」

トリアの指摘に自分を除く全員が頷く。

「はいはい、気をつけます。で、私がシアン侯爵家の人間から逃げている理由だけど」

「彼らの不利益になることでもやらかした？」

オリバーのその言葉にカチンとくる。人を問題児扱いしないで欲しい。まあ、世間一般の子よりは扱いにくいけどね。

「べつつに、変態野郎を退治しただけ。まあ、そのせいで上層部の処分待ち。それでその苛立ちを学校でカツアゲしようとした不良にぶつけたら停学処分になっただけ」

その説明にみんな言葉を失う。反応は、様々でセシルは変わらず侍女スマイル。トリアは、苦笑。カインは、呆れ顔で反対にオリバーは、楽しげだ。

「そろそろバレてる頃だからさ、会ったらお説教とマナー講習が待ってるのよ。いい迷惑、私は別にお嬢様目指してないもん！」

「いや、お嬢様云々は別として普通にお小言の一つは言いたくなるだろう」

「リリイ、異性相手にあまり無茶をするな。どうしても男女では

力の差が出てくる。いくら君が強いのだとしてもだ」

「はい。ということでそろそろ帰るね。あんまり長居すると家族が心配するから」

「……………残念だが仕方ないか。きつとご家族も心配しているだろうからな。セシル、リリーの洋服のクリーニングは終わったか？」

「はい、今からお持ちします。殿下もくれぐれも油断なならないように」

「だから、何もしないってば……………」

リアナの言葉を見事にスルーしたセシルは、部屋から足早に出て行った。彼女の態度はトリアの護衛としては当然だから別にいいけど、何でこんなにも神経質なのだろう。トリアだって軍人ならある程度の訓練はしているだろうし、ここが基地内ならすぐに味方が現れるだろう。それにここが基地内と聞いてちよつと違和感があるんだよね。

何よりこの部屋の作り。応接室兼執務室があつて奥には寝室、お風呂とかに繋がっているんだけど、部屋にある調度品は見ただけで高価と分かる物が多い。物としてはロココな感じの品々。昔のヨーロッパの王侯貴族の物つて言えば分かりやすいかな。

うん、宮殿にある部屋をそのまま移しましたって感じ。それのどこがおかしいって？ 王族だから当たり前じゃないか。それが違うんだな。軍施設にある住居つてシンプルなんだよね、普通。あと室内の作りも全部屋だいたい一緒の場合が多い。一度だけ行ったシアンの軍施設はそんな感じだった。いくら王族が住む部屋だからってこんなに豪華にしないものだ。

まあ、何か事情があるのかもしれないからつっこむのは野暮だよな。そんな事を考えていると突然、オリバーが声を上げる。実に楽しそうな黒い笑みを浮かべて。ああ、さっきの失言がここまで尾を引きますか。

「リリアナ。君さあ、変態をのしたくらいで処分を受けるって、一体どれだけ痛めつけたんだよ」

「うわっ、ここで話をそこに戻す？ 人が触れられたくないことに。……………別に相手の大事な処を機能不全にする一歩手前までにしたくらいだよ」

「お前という奴は……………」

「えゝ、だって相手は変態だよ？ じゃあ、カインはさあ自分より十五も下の未成年の女の子を部屋に連れ込んで襲っちゃうわけ？」
「するか！！ 逆にそんな奴が目の前にいたら何か理由を付けて始末する」

「でしょでしょ。もう、いい加減うざかったんだよ。お姉ちゃん達に振られたからって妹の私をターゲットにするなつての。本当にいい迷惑だよ」

「リリイには、姉上方がいるのか？」

「うん。兄三人と姉二人とあと双子の片われがいる。それが皆そろって才色兼備でさゝ、円卓同盟でも幹部候補なの。そんなだから姉や双子の片われには手がだせない奴らがそのうつぶんを私で晴らそうとするんだ。だから下部組織に配属された時は、万歳三唱したよ。それなのにたまたま仕事関係で本部に呼ばれた時に事件は起きたのよ」

「苦労しているんだな」

「まあ、油断してた私にも責任がいくらかはあるしね。急ぎの用件だったから、姉や双子の片われと一緒に行ってくれるように頼まなかったのがそもその原因だし」

そう、だからこそ早く帰りたいんだよ。きっと今頃、姉上達が暴れ出している気がするんだよね。あんな事があつたばかりだから。とりあえず、死人が出ていないことを祈ろう。

私の家族

私の家族は、主夫でフェロモン垂れ流しの父、そんな父の暑苦しい愛を受け流す母。そして父の美貌を受け継ぐしつかり者の姉二人と美少女顔な双子の片割れの弟。そしてこちらの世界にも母が違う兄が三人。そして平凡顔の私。

そのせいで周りからは、落ちこぼれ扱いされる日々。よくグレなかつた自分と誉めてやりたい。まあ、小さい頃は色々後ろ向きな行動や言動をしてたけどある時バカバカしくなったんだ。だって、容姿や能力なんて遺伝子レベルの問題だもん、私にどうこう出来る問題じゃないし。それに家族からは、うつとおしいくらいの愛情を受けて育つたからね。むしろそんな事で人生楽しまないなんて損だし。だからわりと好き勝手に生きていると思うよ。自由、最高って感じ。

「上の兄三人は、年が離れているからねえ。それに私と違って純粹なウィスタリア人だから、正確な年齢知らないし。そう言えばカイン達つてもうすぐ28歳なんだよね……でも」

「俺達は、純粹なウィスタリア人ではないんだ。そのせいか成長は普通の人間と変わらない。まあ、だいぶ緩やかになってきている感じはあるがな」

「そうそう。今まではちゃんと年齢通りに成長してたんだけどね。それに純粹なウィスタリア人って少ないんだよ。王家や貴族達は多いけど」

「ふうん。まあ、そういうもんだよね。あーあ、私もこっちなになきゃ実年齢通りの外見なのに」

「そう言えば、リリイはいくつなんだ？」

「来月で17歳。まあ、元々童顔で小柄。あつ、胸だけは育つてるかな。そのせいで変態共に狙われている感は否めないけど」

「いやそれは当たっていると思うぞ。他の姉弟も縮むのか？」

「ううん、私だけ。多分、こっちの血が濃いんじゃない？ そのせいでこっちで暮せつてうるさいし。そんな事したら私の自由気ままな生活がなくなるっての。それに基本的にやっかい事やめんどくさい事に巻き込まれるの大嫌いだし、こっちで暮らすってことはそういう事に問答無用で巻き込まれるの決定だもん。絶対に嫌」

「そうだなあ、私もやっかい事は嫌いだからリリーの気持ちは理解できる」

「王族に生まれるだけで大変だもんね。色々な責任もあるだろうし」

「ああ、かなり面倒だ。どこか田舎に引っ込んでゆつくり暮らすのが夢なんだがそうもいなくてな。だから、リリーが自由な生活を守れることを切に願う」

「ありがとう、トリア。とりあえず、シアン家から何か言われたら私が闇打ちしとくから」

「それは心強いな。……………それにしてもセシルは遅いな。オリバー」

「はい、確認してきます」

トリアの命令にオリバーは足早に部屋から出て行く。カインも懷から携帯端末らしきものを取りだして何か確認し始めた。その様子を眺めつつトリアと家族について話していると、オリバーが何やら慌てた様子で部屋に駆け戻ってくる。

「ヴィクトリア様。シアン侯爵と御兄弟方がいらつしやいました」

「そんな話は聞いていないが……………」

「ヴィクトリア様。シアン侯爵家の軍艦が入港したそうです」

「……………もしかして」

三人の視線がいつせいに私に向けられる。

「.....逃げ損ねた」

ああ、やじするー！（前書き）

少し短めです。

さあ、どうする！

こちらにいる兄三人を一言で表すと華麗。父親譲りの美貌に白金の髪、そして紫紺の瞳。それぞれがタイプの違う美男子。

長兄は、二メートルを超える長身で目つきが少々鋭い。でも笑うととても可愛い。私は、笑ってる顔しか余り見たことがないけど、仕事ではいつも険しい顔なのだと三番目の兄は、言っている。ちなみにもう分かっているだろうけど、シアン侯爵というのが長兄ね。

次兄は、まさしく貴公子。涼やかな目元に中性的な美貌。その容貌に相応しい笑みをいつも浮かべている。が、性格はきつい。身内以外には、毒を吐き続ける。見かけに騙され近づき凄まじいほどの拒絶を受ける女性が後を絶たない。ちなみに私が苦手なのがこの兄だ。他の兄達からすれば一番可愛いがついているらしいけど嘘だと叫びたい。あつ、仕事は外交官です一応。あと、私がさっきから言っている悪魔っていうのはこの兄ね。

三番目の兄は……何というか軽い？他の兄達とは違って話やすいし好きだけどね。ただ、この兄が近い将来シアン領軍のトップになることは、ちょっと不安かな。まあ、私には直接関係ないからいいか。

そんなシアン領の顔とも言つべき三人が皇国軍施設に事前の通告なく軍艦を乗り付けるなんて異常だ。ただでさえ父の時代から主家である皇家との関係が微妙なのに。一応、非公式のとは言え妹を保護する為と言えば聞こえはいいけど。でも、非公式なんだよ！？というかばらしちゃ駄目でしょ。世間にひた隠しにしてた真実がばれちゃうでしょうが。

そんな訳で私は只今トリアの協力の元、隠れてます。彼女の部屋にある衣装部屋に。ふっ、皇女様の超プライベート空間に無断で踏み込んでこられまい。私は、ここから高みの見物をさせてもらうよ。トリア達にどう説明するか聞かせてもらおうじゃないか。

衣装部屋と一緒に運んでもらった鞆からある物を取り出す。ソフトボール大の水晶玉。これは、とある世界の魔術師ギルドが作った遠見用の玉なのだ。ある仕事の依頼で報酬としてぶん取った、ではなく頂いた特別な品でかなりの精度で見たい場所を映し出してくれる。

「さあ、見せてちょうだいな」

さあ、どうする！（後書き）

次回は、主人公以外の視点です。誰にしようか、やっぱりトリア？

閑話・茶の間にて

「いない？」

都心近郊のとある住宅地にその家は、あつた。最近では、めずらしい平屋建ての和風建築。だが庭には、洋風のハーブやらが植えられておりどこかちぐはぐな印象を受ける。そんな家の茶の間から低音の女性の声が響く。彼女の家族達には、それが切れる一歩手前だということとは、すぐに察せられた。そしてその原因が下の娘だということも。

「ハッターの所に用事があるって出かけたよ。この前の仕事の件で渡す物があるらしい。夕飯までには、帰るそうだよ」

「アルバート。あの子は、停学中なのよ！」

苛立つ女性の問いかけに対してのんきに答える男性。この二人こそ、リリーの両親である。

仕事帰りの母親は、今も黒のスーツを身にまとったままで、反対に父親は、薄い水色のシャツとジーンズ、それに麻のエプロンを着けている。

「英里、ハッターの所に行ったのなんて誰にも分からないさ。それにあの子も反省していたる？それなのに帰らないってことは、いつものあれじゃないかな？」

夫のその言葉に娘の体質を思い出すと英里の表情は、幾分和らぐ。しかし、それならすぐに帰ってくればいいものを。

母親の考えが読めたのかそれまで沈黙を守っていた人物が声を上げる。

「とりあえず、兄さん達に連絡して姉貴に迎えに行かせたら？」

姉さんは、仕事中だから無理だろうし」

「雅樹。自分で行こうとは思わないの？」

「ん？ 俺は今、現在進行形でみいの後始末中。相手が厄介だから今必死に落とし所を模索中」

「ああ、その問題があつたわね」

現在の香月家の懸案事項を思い出し、英里は頭を抱えた。元々、娘が起こした今回の騒動は、正当防衛が認められすぐに決着がつくはずだった。それをあの男は。権力をかさにして自分の嫁によこせと言い出したのだ。あの方が仕事で忙しいのをよいことに。その上一部の老害共が自分達の利益の為にあの子を貢ぎ物にしようとしているのだ。

「あつ、その手があつたか」

「雅樹、何を思いついたの？」

「ん？ 一族の利益を取りつつ、みいを守る方法。こんなのだうよ」

息子の提案を聞いた瞬間、英里はにっと笑うと立ち上がる。

「ちよつと出かけて来るわ」

こうしてリリィの知らぬところで彼女の未来は決まって行くのだ。
った。

閑話・エヴァンスの憂鬱

「ということ、雅ちゃんの保護を頼んだからね」

「父上。せめてどこに落ちたかぐらい教えて下さい。我々は、義母上達のような能力はないのですから」

仕事から帰るなりあちら側との連絡用の姿見が反応した。そこに映った人物を見た途端、反射的に回れ右をしてその場を立ち去りたくなる。勿論、そんな事が許されるわけないのだがと現シアン侯爵であるエヴァンスは重い溜息をつく。

「妹の居場所すらも分からないのか。私の息子は。育て方を間違えたかな」

眉間に皺を寄せて物悲しそうな顔する父親に思わず言いたくなる。「あなたに育てられた覚えはない」と。

「とにかく早く保護するように。それとしばらく雅ちゃんを君に預けるから。いい機会だから御披露目でも何でもやってしまいなさい」

「そうすると父上の事も表沙汰にするしかないのですが」

「あれから十年以上たつたんだ。あいつならきちんと議会や他の侯爵達も掌握しているだろうから問題ないさ。それに堂々とナタリーの墓前を参りたいしな」

「リリアナを預かることに問題はありますか。あの子は、こちらで暮したほうがいい。でも、急な話ですね？」

「ちよつと問題があつてね。ほとぼりが冷めるまで預かつて欲しいんだ。まあ、あの子も反省しているから。それともうお説教はすんでいるから、これ以上はなしだよ。アベル」

「気づいていましたか。お久しぶりですね、父上」

そう言って現れたのは、エヴァンスのすぐ下の弟のアベルだった。父親によく似た弟は、いつも通り何を考えているか分からない笑みを浮かべている。

「まあ、父上がそう言うならばお説教は止めておきましょうか。ただ、こちらで生活するからにはそれなりの教育はさせていただきますよ」

「……………別にあの子にマナー教育は必要ないと思うが。小さい頃から教えているからね。ただ、出来るけどやらないってだけで」
「そこが問題なんです。そちらでは普通の少女でいられますがこちらではそうはいかない。隙を見せたら食われるだけです」

「好きにすればいい。じゃあ、頼んだよ」

言いたい事だけ言って姿を消した父に対して思わずため息が出る。それでも頼まれた事は実行しなければならない。エヴァンスは、軍施設に連絡を取ると下の弟に呼び出しをかける。するとすぐに壁にかけてあるスクリーンにその姿が映し出された。

「何か用か？ 俺は今すごく忙しいんだけど」

部屋に響く不機嫌な声にエヴァンスとアベルは、思わず顔を見合わせる。楽天的でいつも明るい態度を崩さない弟がめずらしく眉間に皺を寄せているのだ。

「忙しいところすまない。少しいいか」

「兄貴、悪いが今の俺にはやっかい事に首をつっこんでいる余裕はない」

「ああ、そう言えば来期の予算編成中だったね。だけど、家族に

難事がある時に自分だけ無視しようなんてそんな薄情な子に育てた覚えはないよ」

「アベル兄上、俺だってこんな机仕事からさっさと解放されたいんだよ！！　それなのにどいつもこいつも金、金、金って」

髪を掻き回し唸る弟を見て同情はするがこれに必要な事なので「頑張りなさい」とだけ声をかけた。しかし、侯爵家にとっては妹の保護が優先事項なので話しを進める。

「リリイがこちらに落ちたみたいでね、保護しろと父上から連絡があつた。それとしばらくあの子をこちらで預かることにもなつてね。近々、正式なお披露目も行ふことになるだろう。だからすみやかにあの子を捕獲もとい保護する必要があるんだ」

「ふーん。じゃあ、親父の事も暴露しちゃんだ。みんな驚くだろうな、かのセラトラムの悲劇の英雄が生きていてちやっかり新しい奥さんと子供が四人もいますって聞いたたら」

「サイラス……………」

「分かつてるよ。俺だってリリイは心配だから。今から居場所を探知するから待ってくれ」

「探知？」

「ああ、どこに落ちるか分からないだろ？　だから、この間の誕生日に特別にカスタマイズした探知機付きのピアスやテディ用のチヨーカーをやったんだ」

「サイラス特製の品ならすぐに見つかるでしょう。兄上、僕はあの子の受け入れ準備を進めて来ます」

「ああ、頼む」

妹の保護がすぐに実現出来そうでひと安心したエヴァンスだったが、この後判明したリリイの現在地に頭を抱えることになるとは思ひもしなかった。

シアン三兄弟の訪問（前書き）

その内、全話改稿するかもしれませんが、
一人称が思ったよりきつつい為です。
今の私では、無理だと悟りました。

シアン三兄弟の訪問

「失礼致します。突然の訪問のご無礼をお許しください、ヴィクトリア殿下」

「いや、驚きはしたが問題ない。それに貴方は私の婚約者だ、そんなに畏まる必要はない」

「ありがとうございます」

目の前で大柄な身体からは想像つかないほど優雅な所作で挨拶をする男。現・シアン侯爵のエヴァンス・ジル・ド・シアンにヴィクトリアは、微笑む。そして、エヴァンスの後方で同じように胸に手を当てて礼を取る男達へと視線をやる。

「アベルにサイラス。貴公達も息災そうで何よりだ」

「殿下もお元気そうで何よりです」

「軍艦には最低限の人員しか乗せておりません。あくまでシアン家の私的な訪問ですので部下達に他意はございません」

「気にするな、サイラス。それにここには私と私に近い者しかいないのでそんなに畏まる必要はない。いつも通り、話せ」

「なら遠慮なく。よお、セシル。元気にしてたか？」

「殿下、お茶の準備が整いました」

「あれ？ 無視かよ？ ひつでーな、同期の仲間に対して」

「……………侯爵閣下、アベル殿。どうぞ、こちらへ」

サイラスの言葉を完全無視するセシルとそれを気にすることなく彼女に着いて回る彼に思わずセシルは苦笑する。同じように弟を見て苦笑するエヴァンスと目が合った。

「どうぞ、こちらへ」

「はい。サイラス、いい加減にしないか。アベル、連れて来なさい」

「仕方ありませんね」

エヴァンスに命令されたアベルは、後から弟の襟元を掴むとそのまま引きずるように歩いて来た。掴まれた当の本人は、「首がしまる」と叫んでいるがアベルは笑みを浮かべながら無視している。本職の軍人であるサイラスが本気で抵抗すれば簡単に振り払えるだろうから、これは一種の兄弟のコミュニケーションなのだとヴィクトリアは理解する。しかし、ヴィクトリアのその認識を知ったら彼は全力で否定するだろう。そもそも彼がシアン領軍に入るまでは、アベルが軍を統括していたのだ。なので、実力的にはサイラスより上なのである。

「さて、今回の訪問の理由なのですが」

席につくなり本題に入るエヴァンスに、ヴィクトリアは相変わらずだと思ふ。この男は、侯爵という地位に着きながらも駆け引きと言うの苦手で交渉事も全て真っ向勝負なのだ。その分、弟のアベルが裏で動き周囲が泣くはめになる。そのせいか最近では、シアン領との取引に余計な下心を持つことは死を意味すると行政府ではもっぱらの噂だ。

「こちらに七歳前後の白金の髪と紫紺の瞳を持つ少女が落ちてきたと思いますので、その娘を引き渡して頂きたい」

「エヴァンス。普通、人間が落ちてくることなどないと思うが」

「常識ではそうですが、あの娘に関して常識は通用しません」

「もし、その少女が落ちてきたとして。その少女とシアン家の関係は？ 髪と瞳の色からするにシアン侯爵家に連なる者だということとは分かるが」

「ここからの話は時が来るまで内密の話にして頂きたいのですが」

そう言って部屋を見渡すエヴァンスに、ヴィクトリアを含めた全ての人間が頷く。それを見てエヴァンスは、語りだしたのだった、自分達と少女の関係を。

二十五年前の真実？

「まず問題の娘と我々の関係ですが、あれは妹です。実はサイラスの下に四人程兄妹がおりまして、あれは三人いる妹の一番下です」

エヴァンスがそう言った途端、奥の寝室から大きな物音が響く。セシルに目線をやるとそのまま奥へと姿を消す。あの音をたてたのはリリイだろう。彼女もまさか侯爵家の秘密をあつさり話すとは思っていなかったに違いない。

「あなたの性格と妹の事ですから、彼女の所属している組織について少しは話を聞いていることでしょう。我々は、父親からあの子の保護を頼まれております」

「ちよつと待て！ 前侯爵の命令？ それはありえないだろう？ それにリリイが末？」

「リリアナは、双子ですので末という訳ではありません。弟が一人いますので」

「いや、そういう事を言っているわけではない。リリイが貴公達のすぐ下の妹なら分かる。前侯爵が亡くなる前に出来た子供ならなだが、間に他の姉妹がいるとなるとどう計算しても合わないだろう？ いくらウイスタリア人の血が濃いとはいえ……………」

「殿下の仰りたい事は、分かります。でも、その父が現在も存命なら不可能ではないと思いませんか？」

エヴァンスの説明にヴィクトリアは、どんどん混乱していく。前シアン侯爵は、二十五年前に起きた戦争で命を落としている。その事が今もシアン領と皇家との間で大きな大きな遺恨として残っている事を身を持って知っているからだ。

そもその元凶は、自分の祖父であり前皇帝にある。祖父は一言で言うとお色。若い頃は、その政治手腕によって多くの指示を得ていた。しかし、その一方で彼の無類の女好きは有名で貴族や官僚の間では、妻や娘は家に隠せというのが暗黙の了解だった。

前侯爵は、皇太子であつた自分の父と親友であつた為に祖父からも信頼されており順調に出世の階を上つていた。そして、父の妹を嫁にもらい三人の子供をもうけることとなる。しかし、侯爵夫人はサイラスを出産後、病で命を落としてしまった。それでも侯爵は、後妻を娶ることなく三人の息子達を育て上げたのである。もちろん、何度か後妻を迎えてはどうかという進めもあつたが笑つて断つていたという。

転機が訪れたのは、二十五年前。

シアン侯爵領からほど近い他惑星からの侵略が噂に上り始めた頃からだった。表向きは、資源を狙つたものとされていたが、実際はその惑星の王家の姫が侯爵に懸想し婚姻を断られた為らしい。そんな時期に突然侯爵が後妻を娶ると言い出したのだ。しかも、息子に跡目を譲り隠居すると。

しばらくして侯爵は、その後妻を伴い皇帝に挨拶に来た。そこで事件は起きる。侯爵に伴われた年若い娘にあるうことか祖父が懸想したのだ。

そして祖父は、外交上その結婚を認めるわけにはいかないとし、その娘を自分の後宮に召し上げようとした。もちろん、侯爵が黙つて従うはずもなくそのまま娘を連れて侯爵領に戻った。

数カ月後、戦争が開戦。しかし、祖父は侯爵の命令違反を理由に皇国軍の派遣を拒否。その結果、前侯爵は、命を落とすことになった。

その侯爵の訃報を聞き、皇国軍の派遣を訴えていた父が祖父を退

位に追い込み戦争を終結させたのである。しかし、侯爵領の人々の心には国から見捨てられたことへの怒りと敬愛すべき為政者だった侯爵の死への恨みが残っているのだった。

「義母は、かの組織に属する方。乗組員を全て逃がした後、一人残って敵戦艦に特攻するつもりだった父を殴り飛ばして連れ帰ってくれた」

「父は、その事を知っているのだろうか？」

「戦争終結後に挨拶へ行ったらしい。父を自分の世界へ連れて帰ると。この男をここに置いておくと色々な意味でやっかいだ。仕方ないから自分が貰ってやるとな」

「仕方ない？ 夫人は侯爵との結婚にあまり乗り気では無さそうに聞こえるが？」

ヴィクトリアは、聞いていた話とは違うと思った。侯爵と夫人の悲恋は有名で様々な形で知れ渡っている。舞台や映画、小説などだ。共通しているのは、二人は相思相愛だという事と夫人の一目惚れで始まった恋だということだった。

「……………父が勝手に執着しただけです。義母上には、申し訳ないことをしました。あんな若い身空で自分より数倍以上年上の男と結婚しなければいけなくなっただからです」

「アベル、人々の夢を壊すな。……………まあ、義母上は一人で生きていける方だから。結婚したのも周囲に子供を婚外子にする気かと泣きつかれたせい……………」

「兄貴、それ以上問題発言するな！ とにかく殿下、妹を出してください。リリイは、しばらく家で預かることが決めた……………」

ボタン。

サイラスの言葉を遮るように大きな音を立てて奥の扉が明け放た

れる。そこに居たのは、興奮して顔を赤らめたりリアナだった。そして、皆の視線が集まる中叫んだ。

「何、べらべらしゃべってるのよ!! てか、何であたしが兄上達預かりなわけ!？」

何をべらべらと！！

兄達が部屋に入って来ると一瞬、その場の空気が凍りつく。その緊張の発生源はセシルでエヴァ兄上を目にした途端、殺気を放つ。それを察したトリアが自ら兄のもとへ行くことで場の空気を緩ませた。それにしても仮にも主の婚約者に対して本気で殺気を放つとは。

（まあ、アベル兄様が何の反応も示していないし、サイラス兄も笑っているから問題ないだろうけど）

そんな感じで始まったトリアと兄達の会談だったが、この時点でリリアナは高を括っていた。どうせ適当に親族の娘だと言ってごまかすに違いないと。何しろ自分の存在を明かす事は、父が生きていることを白日の下に晒すことと同じだからだ。

それに戦争の原因である父が生き延びて、暢気に第二の人生を謳歌しているなど言えやしまいと思っていたのだ。だが、彼女は忘れていた。長兄は、誤魔化しや嘘が嫌いな直球勝負な人間だということ。

「まず問題の娘と我々の関係ですが、あれは妹です。実はサイラスの下に四人程弟妹がおりまして、あれは三人いる妹の一番下です」

ガタン。

長兄の一言にリリアナは、覗いていた水晶玉を思い切り床に落としてしまった。余りのショックに落としたことすら理解していないようだと思うその場で地団駄を踏む。

「ありえない！ 何をべらべら喋っているのよ！！」

「リリイ様、あまり騒がれると外へ聞こえてしまいますよ」

「セシルさん、いつの間に！！　って落ち着いてられるか〜！！」

一人で恐慌状態に陥っているリリアナを見て溜息を一つ落としたセシルは、彼女が落としたと思われる水晶玉を拾い上げた。

「これは……………水晶？　でも、中に写っているのは……………殿下方？　リリイ様は、この得体の知れない物は何ですか？」

「え？　ああ、遠見用の水晶玉。私が見たいと念じた場所を映し出してくれる便利な仕事道具」

「何か特殊な機械でも入っているのですか？」

「ううん。これを作った人の住む世界に科学なんて存在しないから機械じゃないよ。向こうで仕事をした時に貰った個人的報酬の一つ。私に合わせて調整してあるから、私が望まないかぎりはただの水晶玉だよ」

「まあ、いいでしょう。あなたが一番得体の知れない人間ですからね」

「うわっ、ひどい」

セシルの言葉に嘆いたふりをしたりリアナは、彼女から見えないように微笑む。トリアがいないせいか言葉はきついのだが先ほどよりも自分に対する態度が柔らかくなってきていた。

（それに完璧な侍女姿より、こっちのほうが好きなんだよね。あと、サイラス兄の好きな人ってセシルさんだ。絶対に）

「それにしても、まさか侯爵がご存命とは」

「え？　そこまで言ったの！　何考えてるわけ？」

いつの間にか兄達は、父親のことまで暴露したらしくトリアはもちろんカイン達も驚きで固まっているのが分かった。

（ありえない、ありえない……………。やっぱりここは逃げるべき

？
）

もういつそのこと逃げ出してしまおうかと思い始めたリリアナに更なる爆弾が投下される。

—— リリイは、しばらく家で預かることが決定した

その言葉が兄の口から出た瞬間、全ての事が頭から吹っ飛んでいた。簡単に秘密を暴露した兄達と自分のこれからを勝手に決められたことで彼女は怒りに支配され、そのままトリア達がいる部屋へと走り込み叫んでいた。

「何、べらべらしゃべってるのよ！！ てか、何であたしが兄上達預かりなわけ！？」

捕獲されました

「やっと出て来たと思ったら。それが久しぶりに会う家族に対する態度ですか？　そもそこがどこだか理解しているのですか？

我がシアン侯爵家が仕える皇家の皇女殿下の御前ですよ」

「わたしは、この世界の人間じゃないから関係ないもん！！　それより何でわたしが侯爵家預かりになるのよ！！」

部屋から飛び出てくるなり次兄に食ってかかるリリアナと彼女に對して小言を言いだすアベルに他の人間は口を出すタイミングを完全に失う。はつきり言って二人の会話はまったくかみ合っていない。ひたすら自分の疑問をぶつける妹に、ひたすらお説教をする兄。終わりが見えない兄妹の姿にヴィクトリアは思わず笑ってしまう。しかし、そこに怒声が響く。

「お前達！　いい加減にしないか！！」

「申し訳ありません」

「……………ごめんなさい」

怒鳴ったのはエヴァンスでアベルはすぐさま頭を下げた。そしてリリアナからも一応謝罪の言葉が聞こえる。が、その態度が気に入らないのかアベルが再び口を開きかける。しかし、エヴァンスが手を振ってそれを止めた。そしていつもの低い穏やかな声で妹を呼ぶ。すると、リリアナも黙って彼の側に行く。

「久しぶりだな、リリイ。元気そうで何よりだ。だが、今回はやり過ぎだな。義母上達も頭を抱えていたぞ」

「私は悪くない。正当防衛よ」

眉間にしわを寄せむくれる妹を見てエヴァンスは苦笑する。

「詳しい経緯は、義母上から聞いたから知っている。私はお前の言い分を支持する。その後の騒動は別だが」

「ごめんなさい。でも何で私が……」

「相手側がお前を嫁に寄越せと言っているらしい。本来ならあちらに全面的に非がある。だがお前の主家の若当主が仕事で留守なのをいいことに自分達の都合の良い和解条件を出してきているそうだ」

「本当に不能にしてやれば良かった」

「その解決策として義母上はこちらの世界にリリイが属する組織の支部をお作りになるように進言されそれが通った。そしてその責任者にこちらとの繋がりが深いお前が任じられた。だから当家での預かりが決まったのだよ」

「……………私が責任者？ いやいやいや、それはないでしょう。」

こんな年端のいかない娘にそんな大役はありえない」

「これは決定事項だ。その為にもお前はこちらとの繋がりをより深くする必要がある。サイラス」

「きやあ」

いきなり自分の身体が浮かび上がったことに驚いたりリアナの口から悲鳴が漏れる。だがすぐに幼子のように抱きかかえられたことに気がつきその顔を紅潮させた。

「サイラス兄」

「兄上の命令だ。さあ、帰るぞ。じゃあ、殿下失礼しますね」

「はなせ」

「いてっ、こら暴れるな」

リリアナを捕獲するとサイラスはそのまま部屋を後にして行く。どうやらそのまま自分達の戦艦に強制収容するつもりらしい。

「では殿下、我々も失礼致します。我が家の事でしばらく騒がしいかと思いますが、それらが収まればやっとお約束が果たせるかと思えますので」

「……………それは」

「アベル、行くぞ」

「はい。では失礼致します」

ヴィクトリアに意味深な言葉を残してエヴァンスとアベルは去って行った。

「セシル……………」

「はい。すぐに準備を始めます。良かったですね、殿下」

白の貴婦人（前書き）

お待たせしました。

短いですが2章の始まりです。

白の貴婦人

「ついに見つけた……。これさえあれば……………」

薄暗く所々に埃を被った狭い倉庫と思われる一室に男の感極まつた声が響く。

その手の物を集めるのが趣味の友人に聞いた珍品。話を聞いた時は、そんな物が存在するはずがないと一笑に付したが他の友人達が噂するのを見てそれが実在するのだと確信を得た。そしてついに見つけ出した。あの噂が真実ならばきつと自分の望みを叶えてくれるはず。

「さあ、私の願いを叶えてくれ」

木箱の蓋を開けそれに手を伸ばす。すると男の声に呼応するかのようになり白い光が辺りを照らし、その光の中心に美しい女の姿が浮かび上がった。

白金の髪に紫紺の瞳。そして中世を思わせるドレス姿の貴婦人。その美しさに男は息をのむ。そんな男を見て彼女は楽しそうに笑う。

「私を呼んだのはあなた？」

「ああ、そうだ。私の願いを……………」

「ええ、いいわよ。でも、私の願いも叶えてもらうわ。それが契約の条件」

「分かった。その願いとは何だ！！」

「私の願いはただ一つ。……………を探して欲しいの」

「よし、いいだろう。私の力で貴女の願いを叶えよう」

「ふふつ、では契約成立よ。さあ、私をその手に取りなさい。でも、気をつけて。契約は半年よ。契約を守れなければ……………」

「おお！すごい、すごいぞー！」

しかし、女の言葉を最後まで男が聞くことはなかった。そして半年後、男は命を落とすことになる。その姿は顔に苦悶の表情を浮かべたミイラの姿だった。

——だから、言ったでしょう？ あなたの命で
贖うことになるって。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8068r/>

秘密～異世界ハーフの受難～

2011年11月16日10時37分発行